

ちみちた様子に、それまでソ連人から日本はさびれた。何もないと聞き続けてきた私にはびつくりするやられたのもししい気持ちが一ぱいだつた。

収容所に入つて間もなく、大戸さんお会いしたい方がおりますのでお会いして下さいとのこと、誰かと思つてお会いした。私は伊達市関内小学校長の片平というものであります。今回の帰国者で大戸さんがおられますことを知りました。是非私の学校に奉職してほしいとのこと。私は帰国してから何をしようか、仕事があるのだろうかと思つていた矢先のこととてすぐ、私のような者でよければ是非お願いしますと返事をしました。

家族一同知り合いのある苫小牧市に落ち着いてから単身関内小学校志内気分校に務める身となつた。落ち着いてから家族一同をよびよせ生活することとなつた。

分校児童一年、二年、三年、四年までの複々式編成授業に一苦心、食糧のこと、子供達の通学のこと、こゝとばでいいつくせない道が続いた。

それから白老中学校教諭、白老森野小中学校長、壮瞥弁景小学校長（現在なし）、鴨川町二宮小学校長として四十有余年昭和四十四年無事退職現在にいたつてゐる。昭和六十二年十一月三日勲五等双光旭日章を拝受いたし、身に余る光栄と心から感謝、感激いたしました次第であります。

子供五人はそれぞれ独立社会人として生活しています。家内は七十八歳、私は八十三歳今なんとか健康で暮らしていますが歩んできた道をかえりみて少しでも社会のためにつくして行きたいと思つております。

## 樺太での終戦、引揚げ、引揚げ後の開拓の労苦

北海道 佐藤 豊 治

### 一 樺太での終戦

戦争のニュースが、敵機何機撃墜、又は某所を占領とかで日本は勝つものとはかり思つておりました。

昭和十八年に私は第二国民兵に編入となり沿岸警備などに当っておりますが、八月十五日無條件降伏と聞き信じられませんでした。その中にソ連兵が侵攻し、内幌町民は、女子供、老人を引揚げさせるため港に集合させた。私はその時これが親子の別れかと思いましたが。

密航して沈められた人もおりました。そうしている内に、ソ連兵が町に入って来たので密航することもできなくなりました。

警察官は一番先に連行され、日本軍の幹部の人達も変装して、魚屋さんになったり、もし判れば連行されたものでした。

町民達は一日も早く引揚げたい思いでいっぱいでした。日本の警察がなくなり、代って朝鮮人が警務員となり、日本人に詳しいやがらせをしたものです。

戦いに負けたと云うことはいかに惨めなことかと思う毎日でした。

私達の食生活もだん／＼悪くなり、朝鮮米が少し、大豆・コウリヤンなども充分でなく、食べ方を色々工

夫して山菜などで不足を補って過してきました。

## 二 引揚げる時の労苦

昭和二十三年四月十一日引揚命令が出て早速カントーラ（役場）に行き手続きを済ませ、翌日八時、内幌発の汽車に乗った。麻袋で手作りのリュックサックその上に長女を背負い、妻は次男を背負って乗り込んだが窓は閉めたまゝ、外は見えないようにカーテンをかけ満員で立ち通し人いきれで苦しく大変であった。

その夜は真岡のテント張りの収容所に泊り雨が降り出し、風が強くなってテントが吹飛ばされて、長女三歳が風邪ぎみだったので夜具の梱包をといて使いました。もう着物もいらぬ、裸一ツでも早く日本に帰りたいと思いました。

その内に三階建に移されましたが便所が下水溝のよりに掘って板を渡したもので、子供が落ちて死んだと云う。

一日も早く引揚船が入らないものかと、只港ばかり見ている毎日でした。待ちに待った船が入港した時の嬉しさは忘れられません。

荷物の検査も厳しく縄を切つて調べこれを又荷造るのにお大変であった。ある老人は日本の土を踏むまではと頑張っていたが船から下りホットしたのか、亡くなった人もおりました。

### 三 引揚げてからの生活苦

我々の乗った船は真岡港を出てから有縁故者はそこに、無縁故者は東北六県にと云われ、届けを出しました。私達は遠い親戚が北海道の美瑛町におりそこを頼つて落ち着きました。戦後で親戚といえども受け入れの方も大変であつたと思います。

部落会長さんが心配して、部落会館の薪小屋であつた二坪くらいのところを貸してくれました。

床もなくエンバクのわらを貰つて敷き、家族五人の生活が始まりました。少しでも収入の多い仕事と思ひ、造材の山仕事に陸別十勝三股へ出稼ぎに行き、家に帰るのはお盆と、お正月くらいで、その苦勞は忘れることはできません。

いつまでも薪小屋を借りているわけにもいきません。掘建小屋でもいゝと、小屋を建てました。二年も

の間部落会長さんのお蔭で助かりました。それから掘建小屋に七年その間困つて役場に相談に行ったが、無縁故者が優先だと言われ、一度も受け入れてくれませんでした。

造材山の仕事と云つても道具は前借りして自分で買うのです。家族への送金もあり本当に大変でした。

昭和三十年開拓地に入植することになり、住む家が無いのでオガミ小屋を建てて、笹を刈り開墾を始めましたが小屋の中で火を焚くことが出来ない。雨降りには困つたことが度々でした。

三十一年にやっと掘建小屋を建て、家族と一緒に住むようになり三十二年には二階建を新築しました。引揚げ以来やっと家らしい家に住むことになりましたが、その内に隣の農家で離農することになり、その農地を譲り受けました。

然し金はなく名義を変えただけ、十勝岳の麓で気候、立地条件も悪く、十年くらいで止めました。色々と手を盡したものの生活の道が立たず離農者が続出しました。引揚者だからどこでもいゝと云うことで良いもの

だろうかと思っております。もつと良い場所が無かったのだからかと、一生を棒に振ったような気持ちです。それにしても戦争のために国民がこんな苦勞をしたのです。あの頃の苦勞を後世に言い伝えるものがあります。

## 引揚げ後の開拓に血の苦勞

北海道 秋田 竹雄

終戦の詔勅を聞き、戦争の恐ろしさと惨めさを身に沁みて体験しました。

終戦後もソ連軍の攻撃が続けられたのです。樺太豊原市郊外並川村から引揚げるため馬車で荷物を積み駅へ出しに行ったところ、中止だから荷物は受け取れないと言う。

豊原駅から三キロ離れた西大橋まで引返した時ソ連の飛行機が豊原駅を爆撃、物凄いい爆発音と共にもく／＼とした黒煙、真赤な火の手が上がったのが見えた。

駅の建物と共に駅及び駅前広場に避難していた群衆が吹き飛んだと云う、あの時もう少し駅にいたら私の命もなかったのです。

やがてソ連軍が侵攻して来て、女達は髪を切り男装をしたり、大変な騒ぎであった。幸い父が村長をしていた関係で我が家に一人の保安員らしいソ連兵が寝泊まりするようになり又学校の向い側であったので先生も一人加わりパンを買ったりして、仲よくなり、我が家は安心して生活ができた。その内に私は徴用で造材に駆りだされ家を離れましたが、我が家では馬を四頭、乳牛十五頭飼っていましたので、牛乳を売ったり、苺を豊原のバザールで売って暮しておりました。

又、馬と牛を一つ残してお金に換えたりしました、町の人達は食糧などで大変であったようです。

昭和二十二年川上炭山へ馬搬作業に出ていた時十月の上旬だと思いますが向いの門前さんのお母さんが亡くなったので帰宅したところ、十一月に引揚げがあるとの話で、父が体を悪くして病院の証明を貰い先に引揚げていたので、ソ連の村長に頼み、家族九人分の